



白鳥 省吾
(白鳥省吾記念館提供)

「生まれ故郷の
栗駒山は
ふじの山より
なつかしや」

吾の詩碑があります。この詩碑は栗駒山に向かつて建てられています。子どもころ、近所の友達と近くのお寺の境内や野山を駆けめぐって遊んでいた省吾は、築館から見える雄大な栗駒山を毎日のようにながめて育ちました。人一倍ふるさとを愛していた省吾は、ふるさとの自然や田畑を耕して暮らしを支える農民、美しい風土と厳しい生活環境に生きる人々の姿を詩に表し続けました。



薬師山に建てられた詩碑

明治三十八(一九〇五)年、中学四年のある日、省吾のクラスに郡長の息子辰野正男が転校してきました。正男は文学が好きで、学校に毎日「藤村詩集」を持ってきて読んでいました。文学に興味があった省吾は、正男が読んでいた「藤村詩集」を借りて読みました。この詩集にのっているのは、これまでの日本の和歌や俳句などの定型詩や漢詩とは違い、西洋詩の影響を受けた、形式にとられない新しい形の詩でした。省吾は、初めて見た表現の仕方に心を動かされ、夢中になって読みました。そして、この新しい詩の形式によって、自分の心を表現してみようと思うようになりました。省吾は「藤村詩集」を読みながら、思い浮かんだ詩を一つ一つ書いてねいに書き始めました。書き続けていく中で、詩というものの形式や美しい言葉、空想することの楽しさを学びました。

このことがきっかけとなり、省吾は、正男など文学に興味のある友達と何冊かの文芸雑誌を共同で買い、回覧するようにしました。また、青少年向けの文芸雑誌に、自分で作った詩を投稿し始めました。投稿した詩はいつか入選するようになり、家から学校までの道のりを、常に詩集を読みながら通うほど文学の世界にのめりこんでいきました。中学五年の時、文芸誌「秀才文壇」に投稿した詩が見事一等に入選し、省吾の詩に対する情熱はさらに高まっていきました。

中学校を卒業した省吾は、二高(現在の東北大学)を受験しましたが、不合格でした。そして、その年の暮れ、背中にできていたはれ物が悪化し、一か月ほど入院することになりました。退院後も傷口が全快せず、二高再受験の道をあきらめなければなりません。将来の方向性を見失い、やる気をなくしてしまつた省吾は、気を紛らわすかのように詩を書き続けました。単調で憂うつな日々を過ごすことは辛かったです。その中で孤独をなくさめてくれたのは詩を書くことでした。

そんな心境のところへ、友人の正男から手紙が来しました。「文学をやるんだつたら早稲田がいいぞ。すばらしい先生がそろっているんだ。」正男の手紙から、省吾はいつしか(詩を書くには早稲田しかない。自分も早稲田大学に入り、さらにすばらしい詩を書く。)と思うようになりました。そして早稲田大学に進学したいことを父に話しました。すると文学に理解のある父は何も言わずに賛成してくれました。

明治四十二(一九〇九)年、省吾は待望の早稲田大学英文科に入学することができました。坪内逍遙、島村抱月、片上伸などの著名な教授の指導を受け、文学の世界にのめりこんでいきました。志を同じくする詩人や歌人との交流も次第に多くなりました。また、省吾の詩に対する考え方に大きな影響を与えた「自由詩の父」といわれているアメリカの国民的詩人、ウォルト・ホイットマンを知つたのもこのころでした。

大学に入ってから、詩を作ることに対しての情熱は変わりませんでした。以前のよう、雑誌に詩を投稿することはしませんでした。なぜなら、一人前の詩人として、詩を世の中に発表したいという気持ちがあつたからです。しかし、作った詩を発表する機会がなかなかありませんでした。その上、父からは仕送りが大変なので、「大学を退学してふるさとに帰ってくるように。」と書かれた手紙が届いたのでした。

「文学を学ぶことについて理解をしてくれた父なのに、なぜ……。」

民衆詩派：
大正時代に盛んであつた詩運動の一派。

中学四年：
旧制の中学四年、現在の高校一年にあたる。

郡長：
栗原郡の長官。

「藤村詩集」：
島崎藤村(詩人・作家)の四つの詩集をまとめたもの。

中学五年：
旧制中学校は五年で卒業することになつてた。

投稿：
雑誌などに載せてもらうために原稿を送ること。

坪内逍遙：
明治、大正時代の文学者、英文学者。

島村抱月：
明治、大正時代の文芸評論家。

片上伸：
明治、大正時代の文芸評論家。

ウォルト・ホイットマン：
詩集「草の葉」の著者。

それには理由があったのです。少しばかりの田畑と父と兄の教師の収入では家族八人を養うだけでも大変なのに、東京で生活をしている省吾に仕送りをすることは、簡単なことではなかったのです。省吾は、父からの手紙に、じっと目を向けました。

その後も父から同じような内容の手紙が何度も届きましたが文学を学ぶ意志は変わりませんでした。省吾は「一人前の詩人として詩を書き、日本一の詩人になりたいのです。」と父に手紙を書きました。

やがて父は省吾の気持ちを理解し、苦しい生活の中からわずかな金額を仕送りし続けたのでした。省吾はふるさとからの仕送りを受け取るたびに父の情け深さを感じ、涙が止まらなくなりました。そして、下宿から大学までの道のりを半分電車で行き、残り半分は歩いて通って電車を節約するなど、わずかな仕送りを様々な方法で工面しながら東京に残り、文学を学び続けました。



大正二（一九一三）年、早稲田大学を卒業した省吾は、翌年念願の第一詩集「世界の一人」を、友人の若山牧水たちの協力を得て出版しました。詩集の最初のページには「陸前築館なるわが父母にささぐ」と書かれています。そして、「天葉詩集」「大地の愛」「ホイットマン詩集」「楽園の途上」「現代詩の研究」など次々と詩集や評論集を出版し、詩人として認められるようになりました。

都を百里、ふるさとの

空美しく花さけば、

そぞろに歌う春の鳥。

春三月の雪とけて、

山紫に匂ふころ、

わがふるさとに啼く小鳥。

この詩のように、ふるさとの自然や生活をうたった作品がたくさんあります。形式にとられない日常使う分がしやすい言葉で書かれた省吾の民衆詩は当時大変めずらしく、詩人たちの間で注目を集めました。その後、校歌や童謡、民謡などの作詞も手がけるようになりました。

見よや栗駒山高く

我等雄々しき力あり

迫の川のせせらぎに

我等やさしき心あり

これは省吾が作詞した母校、築館小学校の校歌です。省吾はふるさと栗原郡（現在の栗原市）内の学校の校歌に、栗駒山や迫川などの自然を登場させています。校歌を作る時にはその場所に実際に何度も訪れて情報を集め、多くの人々と交流して作り上げました。そして、日常使っている言葉で、あるがままに自由に表現することをつらぬきとおしました。省吾が作詞した校歌は、現在も多くのの人々に歌いつがれています。



省吾の母校である築館小学校から見える栗駒山

白鳥省吾（本名 しろとりせいご・ペンネーム しらとりしょうご）

白鳥省吾は、明治二十三（一八九〇）年、栗原郡築館村（現在の栗原市築館）に生まれた。「民衆詩派」の詩人として活躍し、「詩を民衆に解放した詩人」として評価されている。宮城県を始めとする小・中・高等学校の校歌の作詞家としても知られている。アメリカの詩人ウォルト・ホイットマンの詩の翻訳者としても著名である。こうして省吾の業績を讃え平成十年「白鳥省吾記念館」が建設された。翌年、築館町（現在の栗原市）主催で「白鳥省吾賞」が創設され世界各国から詩の募集をしている。毎年千数百編の詩が寄せられている。

工面：必要な金や品物を工夫して用意する。
若山牧水：明治、大正時代の歌人。
ささぐ：ささげること。

評論集：物事を批評した文章をまとめたもの。

この詩（都を百里の…）：「天葉詩集」に掲載された序詞（前書き）。

民衆詩：農民の生活や労働者を題材にした詩。